

# 【小説】六本木の思い出（その四）

請川 雅春



昭和五十六年の春となった。

ぼくの六本木での生活が一年を超えたことになる。正直な話、一年前に働き始めた時には朝八時から夜九時までの勤務にぼくの身体が耐えられるとは思っていなかった。最初の数カ月は、土曜日の夜は疲労でクタクタになり、日曜日は朝から偏頭痛に苦しんでいた。しかし、今は六本木の生活に慣れ、偏頭痛に苦しむ日は皆無くなった。

ぼくの生活は新年度を迎えて更に大忙しとなっていた。勤務場所は「陸上幕僚監部監理部法務課」で昨年度から変わりなかったが、四月一日の人事異動で、法務課では自衛官三名と事務官一名が転出し、入れ替わりに新しく三名の自衛官が転入してきた。転入者は全員、地方の駐屯地から転勤してくるので、課内での給与担当であるぼくは、転入者を受け入れる課として旅費請求、給与の銀行振り込み手続き、官舎の手配などで大忙しの毎日を送っていた。ぼくは、この一年間培ってきたネットワークを最大限に活用して初めて経験する業務を何とかこなして

いた。

また、最近仲良くしていた女性自衛官の足立士長と石田士長が市ヶ谷駐屯地に転勤することとなった。彼女達の新しい目標を達成するためには、六本木での勤務は、あまりにも過酷すぎるのかも知れない。住居地と勤務場所が同じ市ヶ谷駐屯地での勤務なら、次のステップのためのスキルを手に入れる勉強がはかどるに違いない。今が彼女たちの人生の正念場なのだと思う。自衛隊が若い人達を大事にし、巣立っていく若者にさえ優しく支援する組織であるということはこの一年間で何度も経験していた。ぼくも、その若い人のひとりかも知れない。

しかし、ちょっとした事件を契機に親しくなった同世代の女性自衛官達と離れるのは少し寂しかった。

一年間過ごしてきた六本木は、ぼくにいろんな顔を見せてきた。

当初の六本木の印象は、裕福な大人たちが集う高級飲食店、芸能人や有名なスポーツ選手が出入りするクラブやバー、若者たちで溢れかえ

るデイスコビルの街と思っていたが、それだけではなかった。大きな通りから細い道に一步入っていくと住宅街があり、小さな公園があった。この街で生活している人々が大勢いて、その人達の息吹がかんじられた。

ぼくだつてまさにこの街で生活している。六本木での一日の滞在時間は十二時間から十四時間、朝食は職場の机でパンをかじり、昼食と夕食は通常、檜町駐屯地内の大食堂で食べている。

しかし、最近はその行動範囲も拡がり、安い値段で食べたり飲んだりできる場所を開拓してきた。現在のお気に入りのお店は「六本木食堂」と呼ばれる飲食店で、採用同期の数名でランチに入ったのがきっかけであった。

場所は、「俳優座」から通りを隔てた向かいのビルディングの地下一階に位置する。一階から階段を下りるとすぐに、暖簾のかかった入り口があり、自動扉ではなくて手動の引き戸がある。手で開けて中に入ると、四脚の椅子付きのテーブルが十組ほど整然と並べられている。店の奥の方には配置してあるガラス棚の中が二段になっており、惣菜などの皿が上下の棚に置かれている。その種類数や内容は、日によって違うが、肉類、魚類、揚げ物類、卵料理、漬物などの小

皿、そして、ごはんのみそ汁や納豆が棚ごとに分類されて並んでいる。

店の中に入ると、まずトレーを一枚手に取って、棚の中から自分の気に入った惣菜をその上に乗せてテーブルに座る。すると、割烹着を着た年配の女性が近づいてきて、取ったお皿の内容をチェックした伝票を置いていく。そして、食事が終わって店を出る時に清算するシステムとなっている。

最近ぼくが選ぶ惣菜は、まず鶏のから揚げか焼き魚のどちらかを選択し、卵焼きとポテトサラダはいつも定番で、そこにごはんのみそ汁が加わる。時々、納豆を付けることもあるが、各皿ともにボリュームがあるので、食べ過ぎに注意しなければならぬ。食べ過ぎると昼からの勤務中眠くなってしまう。一緒に食事をする同期の朝倉と広田の三人でそんなたわいもない会話を交わすこともあるが、周囲の客のほとんどは無言で、黙々と食べるだけなので、自然とぼく達も食べることに専念することとなる。客のほとんどは男性だったが、時々若い女性客もいた。朝倉の話では、通りの向かいにある「俳優座」の劇団員である俳優や女優、そしてスタッフ達が「六本木食堂」を使っているという噂がある

らしい。しかし、「俳優座」で観劇したのは一度だけだし、劇団の俳優や女優を知らないぼくには、たとえ隣に劇団員が座っていても気付くはずはなかった。

最初に「六本木食堂」に入った時は、まるで学生街の定食屋に居るような感覚に陥った。六本木の街中にある店とは思えない異空間であった。ぼくは六本木に住んでいるわけではないが、六本木の住人になった気分を味わえるひと時でもあった。

最近、六本木の生活圏がどうなっているのかという興味が湧いてきたこともあって、六本木でランチをとる時は、遠回りして繁華街のはずれを散策することが多くなった。

防衛庁から六本木交差点を直進して幹線道路を数分歩き、右側の路地に入るとすぐの所に喫茶店があった。昨年、銀行員の玲子さんと一緒にに入った店である。最近、同期の仲間と訪れた時に、夜になるとグラスビールやウイスキーの水割りも飲めることが分かったので、軽く飲みたい時に訪れることが多い。通い始めた当初は玲子さんにまた会えるかも知れないという淡い期待もあったが、最近ではもう無理かもしれないと思うようになっていた。

この建物は、俗に下駄履きマンションといわれる下層階に店舗や事務所が入り上層階に住宅が入っている高層の建物であった。周辺にも同様のマンションや複数の会社の事務所が入っている高層ビルが多かった。住民が住んでいるマンションなのか、会社の事務所が入っている建物なのかは、ベランダに物干し竿や洗濯物が有るかどうかで見分けることができることも発見した。

その日陰の多い通りを抜けると視界が開け明るくなった。道路は少し狭くなるが、学校と思われる校舎と校庭、そして運動場と緑の木々が見えてくる。校舎は左右に複数見え、生徒がドッジボールやサッカー、鉄棒などで遊んでいる。運動している生徒の年齢から、小学校、中学校、高校など複数の学校があるように思えた。小中高一貫の有名な私立学校かも知れない。

さらに比較的広い公園もあるので、ここまで来ると、六本木の街の非日常の雰囲気は消える。最近のぼくは、六本木の繁華街から少し離れたこんな場所を歩くのが好きだ。気持ちが落ち着く。

その文教地区の一角に、ひっそりと佇む白い洋風の建物を見つけた。玄関の間口が広く、高

さがあるが窓の配置から一階建てと思われる。

建物の形状から、昭和初期の歴史ある建物に思えた。最初は、どこかの国の大使館かと思ったが、厳重な警備をしている様子がなく、開放的な出入り口なので、何らかの記念館か資料館、または博物館か美術館かも知れないと思った。ところが、玄関口をよくよく見ると掲示板があり、そこには礼拝への参加案内の文章が書かれてあった。「当教会では、日曜日朝十時から礼拝を行っています。どなたでもご自由にご参加ください。」簡潔な文章であった。しかし、そのおかげで、この建物がキリスト教の教会であることが分かった。建物の目立つ場所に十字架を掲げているわけでもないのに、よく観察しないと見逃してしまう。

これまでは、キリスト教に対して何の関心も持っていなかったのに、この教会に気付かなかった。

それは、一カ月ほど前になるだろうか。ぼくの職場に抗議の電話を掛けてきたクリスチャンの女性がいた。ぼくは、その人に「抗議があるなら防衛庁に来てくれ」と電話で言ってしまった。そのせいで、目が不自由にもかかわらず、電車で六本木まで出向いて来たのだ。ぼくは、

申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、それ以上に衝撃を受けたのは、抗議の内容が自分のためではなく、全く面識のないクリスチャンの女性のためであったことである。住んでいるところも違えば、会ったこともない人のために、防衛庁に抗議の電話を掛けてきて、さらには来庁までして抗議しなければならなかった理由が理解できなかった。この二人に共通点があるとすれば、キリスト教を信仰している同じクリスチャンであることだけであった。

宗教って何なのか、キリスト教とは何なのか、クリスチャンとはどんな人達なのか。採用同期の仲間達にも、幼馴染の高ちゃんにも相談できないことであった。教週間悩んだ末に、この六本木の教会の礼拝に参加することを決心した。最後にぼくの背中を押したのは、掲示板に書かれていた、「どなたでもご自由に参加ください。」の文章であった。

その五月の日曜日は朝から快晴で、教会に行けない理由を見つけないことが困難な日でもあった。誰にも相談しないし、誰も誘わないでひとり六本木に向かった。日曜日に六本木に行くのは初めてだったが、服装は、毎日出勤する時と同じダークスーツにネクタイとした。ぼくの

服装のバリエーションが少なかったこともあるが、教会の礼拝にカジュアルな格好で礼拝に参加するのは失礼だし、また目立ちすぎると思っていたからだ。

六本木駅には礼拝開始時間の一時間前に着いた。六本木交差点に角にある誠志堂書店で少し時間を潰していたが、早めに礼拝堂に入って、信者の人々が集まる前に教会内の様子をうかがった方がいい気がした。また、早めに、隅の方でいいので自分の場所を確保したかった。「機先を制すれば万事忒りなし」だ。これは、戦争を行う際の戒めの言葉だが、ぼくの思考回路は、自衛隊化しているのかも知れない。

誠志堂書店を出て真っ直ぐ教会に向かったので、ゆっくり歩いたつもりでも十分も経たないで目的地に着いた。何回か覗いた入り口は全開となっており、「どなたでもご自由に参加ください。」のとおり、開放的な空間が続いていた。ぼくが入り口の扉をくぐると、正面の奥にテーブルが置いてあり、その上には少し大きめの十字架が置いてあった。右には小ぶりのパイプオルガンが据えられており、教会の礼拝堂に間違いなかった。そして、中央のホールには木製の椅子が整然と並んでいた。横に十脚ほど並んで

おり、縦に十数列並べられていたので、ざっと計算しても百名以上の人が入れる計算になる。そのちょうど真ん中に人が通れるような空間が空いていた。映画で見る教会での結婚式で、新婦が父親と一緒に入場する時に歩くバージンロードの位置だが、結婚式を挙げるわけでもないのか、それよりも狭かった。全体的には、当初予想していた教会のイメージより、かなり簡素な造りであった。

予想どおりまだ人がそれほど集まっていなかった。それでも、係りの人達なのか、気の早い人達なのか、数名の女性が集まって椅子に座りもしないで談笑していた。

ぼくは、どうすればいいのかわからないまま、入り口から数歩のところに行っていると後ろから声をかけられた。

「おはようございます。礼拝に来られた方ですか。」

振り返ると、やさしそうな微笑みを浮かべた人の良さそうな年配の女性が立っていた。年の頃は、ぼくの母親と祖母の間くらいに見えた。グレーのロングスカートにベージュのカーディガンを羽織った、比較のカジュアルな服装であった。そして、ぼくが「はい。」と答えると、ぼ

くの方に一步近づいて来て更に質問を続けた。

「学生さんですか。」

「いえ、社会人です。この近くで働いています。」  
ぼくの回答を聞こえたかどうか分からないが、女性は話を続けた。

「時々、キリスト系の大学で神学を専攻した学生が、この教会にいらっしやるのよ。皆さん真面目な学生さんで、牧師さんの話を一生懸命聞いてねえ、ノートにメモまでとる学生さんもいたわね。多分、牧師さんを目指している学生さん達なのよね。その子達は、半年もすると来なくなっちゃうんだけど、別の教会に行ったのか、牧師さん養成のために上の学校に行ったのかどちらかと思うのよ。将来、どこかの教会で成長したあの子達に会えると嬉しいんですけどね。」

そう言って、当手を懐かしむ表情を浮かべた。「あなたが、彼らの雰囲気似ていたのよ、てっきり牧師さん候補の学生さんだとばかり思っただけで私の勘違いだったわね。でも、教会に来てくれる方々は歓迎ですよ。私は、この教会の婦人部に所属していて、教会のいろんな行事のお手伝いをしています。今日は礼拝の日なので、お友達と一緒に準備中なんですよ。」

女性の視線の先には、並べた椅子を整理して

いる人、テーブルに花を飾っている人、パイプオルガンの準備をしている人達が、其々にかいがいしく働いているのが見えた。

「あなたは、教会での礼拝の経験があるの。」

「いえ、初めてです。」

ぼくがそう答えると、女性は一瞬、えっという表情をして、うんうんと頷いた。

「まあ、教会では大歓迎よ。じゃあ、礼拝が始まるまでにまだ少し時間があるので、この辺に座って待っていてください。後で礼拝に必要なものを持ってくるわね。」

そう言われて、ぼくは聖書が必要なのかと思った。そのせいで、少し構えた表情をしたのかも知れない。

「いえ、そんな大げさな物じゃないのよ。お祈りのことばとか讃美歌とかが載っている小冊子があるの。後で持ってきますね。ここに座って楽しんでいてくださいね。礼拝が始まるまでにまだ少し時間がありますから。」

そう言っ、婦人部の仲間のところへ向かった。

改めて礼拝堂を眺めると、室内が非常に明るく開放的なことに気付いた。さらに観察すると、壁全体が白く、部屋に光を取り込むために窓が

ラスだけではなくて、壁や天井の至る所に分厚いガラスが埋め込まれていて、あらゆる角度から光が入ってくる構造になっていた。今日の好天気もあって、礼拝堂の中は光の洪水状態でもかかもキラキラと輝いていた。

集まって来る人達も、年配の人が多い気がするが、男女を含めて多様な人がいた。六本木という場所のせいとか、欧米人と思われる家族が数組入ってきた。この街には米軍の施設が残っているし、各国の在日大使館の数も多いと聞いている。

また、外国人も日本人も、礼装ではなく、落ち着いた色やデザインの普段着で、皆様にリラックスした楽しそうな表情をしていた。教会に来ることが週に一度の楽しみになっているのではないかと思った。

そんな人々の中に、異質な男性四人組が入ってくるのが見えた。ジャンパーにジーンズにスニーカーという、少しカジュアルな服装の男が三人、彼らを先導している体格のいい男の組み合わせで、先頭の男の服装だけは金ボタンが付いた紺のジャケットにグレーのスラックスという少しフォーマルな服装であった。ジャケットの下に見えるシャツも含めて衣装すべて高級品

に見えた。彼らは皆ぼくより年上に見えたが、一番若い男は同世代かも知れない。

その四人組は、ぼくに声をかけてくれた年配の女性や礼拝の準備をしている婦人会の女性達に声をかけて挨拶をしていた。顔見知りらしい。左手を上げて挨拶している紺ジャケットの男の左手首から金色の腕時計がキラリと光った。

この四人組はいったい何者なのだろうと思っただが、それを言うなら、ぼくだって教会の信者の人達から見ると異様な人物である。いや、間違ひなくそうだ。ぼくの勤務場所が知られたら、クリスチャンの女性の夫を護国神社に合祀した組織の一員で、キリスト教の敵と思われるだろう。それはまづい。

四人組の男たちは、最前列の左端の席に並んで座った。ぼくよりも相当に歓迎されている。

続々と人が集まり、百名を越したかもしれない。そう思って周辺を眺めていると、先ほど声をかけてくれた女性がぼくの隣に座った。その手には小冊子があった。

「お待ちせしたわね。」

そう言っ、その小冊子を手渡してくれた。「聖書が必要なら、後でお持ちしますよ。言ってください。」

そして、人の好い笑みを浮かべた。

「いえ、聖書は大学時代に持っていましたので大丈夫です。」

それは嘘ではなかった。ぼくは、大学生の時に海外留学したいと思っていて、その最初の試みとして英会話教室に通っていた時期があった。その時の先生が英国から来日していた女性で、最初の授業の時に、英語と日本語の対訳が付いた聖書を生徒全員にプレゼントしてくれた。当初は、英語の教材として使うのかと思って大事に保管していたが、半年後にぼくがその英会話教室を辞めるまで一度も使用されることはなかった。そして、その聖書は今でもぼくの本棚の片隅に眠っているはずだ。ぼくは、まっさらの聖書を一冊持っている。

「あらそう。」

そう言って、小冊子を指さして、

「この本は、お祈りの言葉と讚美歌が載っているのよ。礼拝の始まりの時にみんなで神様にお祈りを捧げて、その後に神様を讃える歌である讚美歌を皆で歌います。あなたは、目を閉じてそれらの言葉に耳を傾けるだけでいいと思いますよ。何回か聞いてみると、すこしずつその意味が分かってくると思いますよ。」

ぼくは、何回ここに来ることになるのだろうと思いつながら小冊子を開いた。

最初のページには、大きな活字で「祈りの言葉」と書かれていた。そして、改行された次の行からは『天にまします我らの父よ。ねがわくは御名をあがめさせたまえ。御国をきたらせたまえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。我らに罪をおかす者を、我らがゆるすごとく、我らの罪をも、ゆるしたまえ。我らをこころみにあわせず、悪より救いだしたまえ、国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン』と記載されていた。どこかで聞いたフレーズではあったが、どこで聞いたのかまでは思い出せなかった。

次ページからは数ページにわたって、楽譜と歌詞が書かれていたので、これが讚美歌だと思ったが、知っている曲はひとつもなかった。

小冊子の内容を一所懸命に確認しているぼくを気遣ってか、

「頑張ってるようなことではないから。持ち帰ってもらって結構ですからね。」

そう言って、微笑んだ。この婦人の笑顔は素敵だ。これまで他人に悪意を持ったことのない、

育ちのいい女性に思えた。

「せっかく、あなたのような若い方が礼拝に来てくれたのに、今日はあなたと同世代の男性は来ていないわね。」

ぼくは、「そうなんですか。」と言葉だけを返して、もう一度教会の中を見渡したが、確かに若い女性が少し参加しているのは見えたが、若い男性は殆んど見当たらなかった。

「先週だったか、若い男女のカップルの方がいらしてね、ちょうどこのあたりに座っていたんだけど、礼拝の途中で、二人が寄りかかって寝てしまったのには驚きましたわ。」

ぼくは、そのカップルのことを想像してみた。ふたりは土曜日の夜から日曜日の朝まで六本木で遊んで、それでもまだ別れがたくて教会に飛び込んで来たんじゃないか。前日の夜は、少しおしゃれな店で夕食を執って、その後はオールナイトのディスコで踊り、明け方からは喫茶店でウトウトと過ごし、朝食をとってもまだ帰る気になれなかったのか。もしかしたら、二人は結婚の約束をしていて、結婚式は教会で挙げたいと思ったのかも知れない。彼女が下見したいと訴え、そして教会の礼拝に参加する流れになった。礼拝堂の中に入るまでは良かったが、徹

夜で疲れ果てたふたりは礼拝中に寝込んでしまった。教会にとつては迷惑この上ないが、微笑ましい光景ではあったことだろう。

いよいよ礼拝が始まった。

いつの間にか、壇上には黒い法衣と思われる上衣を羽織った牧師さんが立っていた。そして、「お祈りのことば」とマイクを通して声を上げると、先程貰った小冊子に書いてある文言のとおりに、『天にまします我らの父よ。ねがわくは御名をあがめさせたまえ。』とお祈りを始めた。参加者全員で声をあわせた。

ぼくは、隣に座った婦人から貰った小冊子を開いて目で文字を追った。

お祈りの言葉が終わると直ぐに、パイプオルガンの華麗で厳粛な音が流れ始めた。迫力のある音は、耳だけではなく身体全体に響いてくる。讃美歌が始まったのだ。顔を上げると、壇上の右側にパイプオルガンを弾いている若い女性の姿が見えた。

ぼくがこれまでに聞いたことのない曲であったが、妙に懐かしく思った。みんなで合唱している。男性の声と女性の声が融合している。さらに、パイプオルガンと人の声が見事にひとつになっ

壇上の右側に位置するパイプオルガンと演奏している女性が妙にキラキラと輝いていることに気が付いた。パイプオルガンの金属部分が光り輝いている。演奏者の黒髪も艶々と光っている。急に光の量が多くなった気がして、どうしてこうなったのか不思議に思いながら、天井を見上げると光のシャワーが降り注いでいた。天井部は間接照明になっているのか、どのような構造でこれほど大量に光を取り込んでいるのかは分からなかったが、屋根を通して大量の光を取り込める何らかの細工が施されているとしか思えなかった。正午近くになり、日が高くなつたせいか、屋根から入って来る光の量が増している。そして、窓から入って来る光と一緒に、礼拝堂の中にいる人々を上下左右から光で包み込んでいる。ぼくは、光と音による協演に少し酔っていた。

その瞬間、ぼくはある既視感にとらわれている。それは、昨年、銀行員の山崎玲子さんと一緒に行ったディスコの強烈な音楽と、強い照明と、その照明の光を跳ね返すミラーボールから乱反射してくる光を浴びて踊っていた時の感覚に似ていた。光と音による心地よい刺激は同種類のものを感じた。

不思議な感動を覚えた。また小冊子に視線を落として、讃美歌のページを開いたが、演奏されている曲を見つけることはできなかった。

讃美歌が終わると牧師さんの説教が始まった。教会での説教は初めての経験であり、聖書を読んだことのないぼくにはかなり難しかった。牧師さんの話の流れから、聖書のある部分を解説していることだけは分かったが、牧師さんの話にはついていけなかった。今日の礼拝は初心者を対象にしていけないのかも知れない。先週来訪したという若い男女のカップルが途中で眠った理由がよく分かった。

「それでは、今日の説教は以上にしたと思います。」

ぼくにとっては長い説教の時間がようやく終わった。

牧師さんは更に言葉を続けた。

「実は、最近月に一度くらいこの教会を訪ねてくれる方々がいます。」

そう言っ、最前列左側に座っていた四名の男性の方に視線を向けた。段取りはついていたのだろう。牧師さんが大きく頷いたかと思うと、彼らは立ち上がり、回れ右をした。

「当教会で顔見知りの人もいますが、こちらの



方々です。」

すると、四人の男たちは、ぼく達礼拝参加者に向かつて軽く頭を下げた。

少し間を取ってから、牧師さんは言葉を続けた。

「この方達は、ここから少し離れた都内の療養所で苦しい闘病生活をしています。大変なご苦労をされていますが頑張っていると聞いています。そのことを知った当教会のスタッフと婦人部の皆さんが療養所のお手伝いに通い始めたのです。もう、一年以上になりますか。今日は、その療養所の四名の方がお礼の気持ちを教会の人達に伝えたいとのことで、礼拝に参加してくださいました。松村さんが代表して、ご挨拶したいとのことでしたのでご紹介いたします。」

松村と呼ばれた男が、牧師さんの隣に登壇した。それは、紺のジャケットを着た体格のいい男であった。

そして、牧師さんからマイクを受け取り喋り始めた。

「ただいま、牧師様から紹介された松村です。今日は、我々のような者を教会に受け入れていただき、ありがとうございます。また、牧師様からは過分な紹介をいただきましたが、我々は

心の弱い未熟者です。我々が闘病している病気とはアルコールや薬物の依存症なのです。この病気は厄介で、ちよつと油断すると、身体のかなかで暴れ始めて人格が変わります。そして、身近な人に迷惑をかけてしまいます。」

礼拝堂の中に小さな騒めきの声が上がったが、男が気にする様子はなかった。牧師さんも動じる様子を見せずに、あいかわらずのこやかな表情を崩さなかった。

「世間からすれば鼻つまみ者で、近づきたくない種類の人間であります。そんな我々に手を差し伸べてくれたのがこの教会の牧師様をはじめとした人達です。特に婦人部の皆さまは、お忙しい毎日を送っているにも関わらず、頻繁に我々の療養所を訪ねて来られ、掃除をしてくださいたり、花を飾ってくれたり、優しくお話してくれたり、さらには、お菓子や着るものや読み物を差し入れていただきまます。我々の多くは家族からも見捨てられていますので本当に感謝しています。感謝しても感謝しきれません。でも、それに対して我々は何も恩返しすることができません。」

男は饒舌だった。

「でも、受けた恩は必ず返します。その第一歩

が自分たちの病気を治すことと考えています。病気を治して一日も早く社会復帰することだと思っています。また、最近月に一回くらい礼拝に参加させて頂いています。礼拝に来ると心が洗われるような気がするんです。そして、心が元気になります。牧師様、我々のためにいろいろご配慮いただき、本当にありがとうございます。そして、今日ここに参集された皆様全員に感謝申し上げます、御礼のご挨拶とさせていただきます。」

男は神妙な顔をして、深くお辞儀をした。壇の下の三人も申し合わせたように壇上の松村と同じように深くお辞儀をした。

ふつと我に返ると、隣に座っていたはずの婦人がいなくなっていた。そして、椅子と椅子の空いた通路から前方に歩んでいる婦人部の人達の中にその姿を見つけた。

また、牧師さんがマイクを持って話し始めた。「松村さん、ありがとうございます。あなた方の勇氣ある告白に敬意を表します。私たちの教会が、あなた方の闘病に少しでもお役に立てていれば嬉しく思います。今日は、婦人部の方々からご支援の品を用意していると聞いています。お受け取り下さい。」



婦人部の女性達から四人の男ひとりひとりに紙袋が渡された。袋の中身は、その大きさから衣類ではないかと思われた。男たちが紙袋を受け取ると大きな拍手が起こった。

ぼくは、目の前の出来事を十分に理解できてはいなかった。

教会の中に、アルコール依存症の男たちと善意の女性達がいて、それを見守る幸せそうな人達、そして聖書を使ってイエス様にぼく達を導く牧師さん。「カオスの世界」という言葉が浮かんだが、それとは少し違う。

牧師さんの「以上で今日の礼拝は終わります。」の言葉で、本日の礼拝が終わった。ぼくにいろいろお世話してくれた婦人に一言ご挨拶してから、開いている後ろの扉から礼拝堂を出た。そこは礼拝堂前室で、少し広めの待機スペースとなっており、信者の人々が談笑していた。目の前に洗面所があったので、ぼくは男性用の表示を確認してその中に入ってしまった。それほど広い洗面所ではなかったが、男性用便器が二つと、個室が二つ設置してあった。

ぼくが用を足していると、後ろの扉が開いて誰かが入ってくる気配がした。そして、ぼくの右隣の便器で用を足し始めた。ぼくの視界の端

に見えたその人は、礼拝の後に挨拶した松村という男のように見えた。隣の男の左手首にキラリと光る金色の腕時計が見えた。間違いないと思った。

その男が隣に立つと、礼拝堂の中で見た時以上に背が高く、ぼくより頭ひとつ抜けていた。また、立派な体格で、肩幅が広く、胸板も厚い。格闘家を思わせる雰囲気をもっており、強烈な威圧感を感じた。ぼくが、横目で男を見ていることに気付かれたのか、男が声をかけてきた。「おい、てめえ。若いくせに、こんなむさくらしい所に来てるんじゃないよ。」

先程、壇上で話していた口調とはまるで違う威圧的で乱暴な言葉づかいであった。

「てめえの狙いは何だ。女か、金か、そのどちらかだろう。」

ぼくは、うっかりこの男の顔をまじまじと見上げてしまった。男も、ぼくの顔を見下ろしていた。その眼は妙にギラギラしていて、薄気味悪かった。

ぼくは、初対面の男に何故そんな言葉を投げかけなければならぬのかを考える前に、本能的にこの男に関わってはいけないと思った。

ぼくは、手も洗わずに洗面所から逃げ出した。

男が追いかけてくることはなかったが、恐怖感でいっぱいだった。仲間の三人の男も洗面所前にたむろしていた。ぼくは急いで、教会を出て行った。

歩いて教会から遠ざかると、少し気が落ちついてきた。人のことを「てめえ」と呼ぶ知り合いは、これまでもいなかったし、今もない。初対面の男に何故暴力的な言葉を投げかけられねばならなかったのか。いや、待て。松村という男がぼくを威嚇した真意は、この際どうでもいい。ぼくが、教会を訪れた理由は、目の不自由な白石さんの信じるキリスト教が何なのかに興味があったからだ。決して、キリスト教に対する求道の気持ちがあったわけではない。さらには、白石さんは美女のカテゴリーに入る容貌をしている。背が高く顔が小さい。きれいな長い黒髪を持ち、透きとおるような真っ白な指をしていた。モデルか女優さんのようだ。松村の「てめえの狙いは女か」という声が聞こえてくる気がした。それは違うが、百パーセント否定することもできないのではないか。

地下鉄の六本木駅を目指して歩いていると、例の喫茶店が見えてきた。珈琲でも飲みたい気分だったが、六本木を離れたい気持ちが勝った。

喫茶店を通り過ぎようとした時、自動扉が開き女性がでてきて鉢合わせになった。

ぼくは、あつと息を飲んだ。半年近く会っていない人、会いたくて仕方なかった人、もし会えたらまずお詫びしなければならぬことがたくさんある人、そして、尋ねなければならぬ質問がやまほどある人、その人である。

しかし、ぼくは気の利いたセリフを思いつかなかった。でも、何か言葉をかけないと逃げられるかも知れない。そう思って、

「こんにちは。お久しぶりです。」

そう言った。すると、彼女も驚いた様子で、「うん。」

と一言だけ言って、頷いた。暫く沈黙があった。正面を向いた彼女は半年前と少しも変わらなかったが、髪の毛が伸びて肩にかかっていた。

「時々、この店の珈琲が飲みたくなっちゃうの。今日は天気がいいから来ちゃった。」

ぼくは、彼女の後から連れの誰かが出てくるかもしれないときよろきよろきしていたが、誰も出てくる様子がなかった。少し安心したが、続ける言葉が出てこなかった。すると、彼女がまた口を開いた。

「この近くに、おいしいクレープ屋さんができ

たの。よかったら付き合ってくれない。」

半年前と同じだ。いつも彼女がリードしてくれる。未知の世界に誘ってくれる。ぼくの六本木での生活は一年を超えたというのに、ぼくは少しも成長していない。でも、まあいいか。また、彼女とお店にいつて、いろいろな話ができればいい。今日は、彼女の笑顔が見られただけで十分だ。

彼女の案内に従って歩く日曜日の六本木は新鮮だった。街並みをよく見ると、一年前より華やかな店構えが多くなった気がした。

正午近くになり、太陽の輝きが増してきた。六本木の街の色は、教会の礼拝堂と違ってカラフルだ。礼拝堂の中は白一色だったが、街の中の色はいろいろな色の光で溢れている。そして、それらはいろいろな輝きを放っている。

六本木の街は、一年前よりも確実に輝きを増していた。バブルの波が、もうすぐそこまで来ていた。

(完)

